

令和7年11月8日(土)

栗林さんが選ばれた「仁」についてですが、これは真正面から切り込んできたなと思いました。一番大元の根本にある言葉ですから、中身は非常に深いものです。

「仁」と聞いても、すぐにピンとこない方も多いのではないのでしょうか。何となく分かる、という方はどれくらいおられますか。半分くらいですね。明快に仁とはこうであると言い切るのは難しいので、なんとなくで良いのです。

「仁」は、論語で最も根本の話です。今日は雑談なしで、論語の解説に参りましょう。

①八佾第三【3】

子曰く、^{し いわ}ひと^{ひと}にして^{じん}仁ならずんば、^{れい}礼を^{い か}如何にせん。^{ひと}人にして^{じん}仁ならずんば、^{がく}楽を^{い か}如何にせん。

事務所からここへ歩いて来る途中でふと思ったのですが、「仁」は、何のことはない、まるで母親のようなものだったのです。いつ、どんな時でも、何があっても、母は子供の味方ですね。たとえ何か悪い事をしてしまった、結局は母親が面倒を見てくれる。常に子供の味方をする存在であり、子供から見ても、いつも自分の味方だと感じる。そういう存在が「仁」だと感じました。

ですから、お孫さんに「仁ってなあに？」と聞かれたら、「おばあさんみたいな人だよ」と言ってあげても良いと思います。何があっても、私はあなたの味方だから、と。

また、食べ物が少なくてお腹が空いてしまった時を想像して下さい。例えば、おにぎりが一つしかない。子供が食べて足りないと言え、おばあさん自身もお腹が空いているのに半分分けてくれる。まだ足りないと言われたら、しょうがないねえと言って、残り全部を子供や孫にあげてしまう。自分が食

べる分を全部差し出してしまう存在です。

子供が困っている時、ひもじいとき、とにかくおばあさんに頼れば何とかしてくれる。子供からすると、仁は本当にありがたいものだと思います。子供向けにおばあさんが説明するなら、そういう言葉で良いでしょう。

前回、前々回も少し触れましたが、これは西郷隆盛の有名な言葉です。西南戦争の際、西郷隆盛はもうここまでだと判断し、あちらこちらから集まってきた人達に、ここから先は自分の死に場所を定めるだけだから、もう帰ってよいと伝えました。

その時、中津藩からは 25、6 人程が参加していました。彼らは国を出る際、どんなことがあっても隊長以下、一心同体で行動すると誓っていたにもかかわらず、隊員は帰るように言われ、隊長だけが西郷の下に残ろうとしました。そこで論争が起きました。隊員達は何があっても一心同体で行動を共にすると約束したことを主張しました。

そこで、隊長が隊員たちに語った言葉が、よく紹介されます。隊長は「あなた達は西郷隆盛と直接会っていないから、帰れと言われれば素直に帰りますと言えるだろう。しかし私は毎日、西郷隆盛と顔を合わせてきた。西郷という人は一日接すれば一日の愛情が生まれ、二日共にすれば二日の愛情が生まれる。私は何週間も生死を共にし、西郷の傍にいた。一週間もいれば、もう生涯離れられなくなる。寝起きを共にする日々が続くと、西郷から離れられなくなる。

この話から、西郷隆盛が人を強く惹きつける魅力を持っていたことが伝わってきます。西郷隆盛は仁者だったのか問われる時、このエピソードがよく引用されますが、仁を身に付けるのは大変なことです。

誤解されがちな事は、お金をばら撒けば人が集まることもあります。人が集まるだけで仁者と呼ぶのは誤りです。そういう場合はむしろ不仁者が多いものです。仁とは、去った後あの人は仁者だったと思えるようなものです。

西郷隆盛には、何となく親しみを感じ、共に時間を過ごすとは離れ難くなる力があります。なぜそうなるのかと考えると、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允の中でも、人に対する親切や細やかな気配りは西郷が群を抜いていたように思われます。

西郷隆盛は、何か問題が起きた時、その処理や経過を関係者へ後から非常に細かく手紙で報告しています。現在、私は西郷隆盛の書簡を調べて読んで

いますが、細部にわたる内容を様々な人達へ丁寧に書き送っており、感心しました。

また、人柄の温かさがにじみ出るような細やかな気配りもありました。西郷隆盛には三人の妻がいましたが、二人目の妻である愛加那は、西郷が島流しに遭った際に結婚し、二人の子をもうけました。ただ、共に暮らせた時間は長くありません。

書簡を見ると、愛加那本人に直接手紙を出さず、愛加那の兄弟や親しくしている人達へ手紙を送り、「戦争で駆け回っていてなかなか帰れないが、愛加那はどうしているだろう。すみませんが、どうか面倒を見て下さい」と頼んでいます。

これは、西郷隆盛の当時君主である島津久光との関係が背景にあります。久光から見れば、西郷は大変けしからぬ存在であり、島流しも強い不信と怒りによるもので、獄死させても良いという程憎んでいました。もし、西郷が島で愛加那親子と楽しく暮らしているという話が久光まで届けば、自分だけではなく、愛加那や子供達にまで咎めが及ぶ可能性がありました。その為西郷隆盛は、愛加那親子に何が起きるか分からないから決して私の所には来させないでほしい、と周囲に頼む一方、その手紙の裏には本当は会いたい、元気にしているだろうか、という思いが滲み出ています。

こうした細やかな心配りを、西郷隆盛は生涯続けていました。その積み重ねによって、周囲の人々は、西郷隆盛が常に自分の味方であり、何かあれば馳せ参じるべき存在だと感じるようになったのでしょう。これが、仁を示す一つの表れだと思います。

最近では、袴田さんの事件が思い起こされます。日本で無実の罪を着せられて厳しい取り調べを受け、自白を強いられた方です。裁判では一貫して無実を訴えました。袴田さんは自分の姉宛てに自分は一切悪い事をしていないので、胸を張って生きて下さいと手紙を出していました。弟はしていないと断言しているので、世間がどれほど非難しても姉の私だけは弟を守ると覚悟を貫きました。その結果、長い年月を経て無実を勝ち取ったのです。

このように、世間のすべてを敵に回しても、自分だけはこの弟を守る。その姿勢を貫くことは簡単なものではありません。

人にして仁ならずんば、樂を如何にせん。

ここで言う楽は、音楽のことです。音楽を聴き、自然と背筋が伸びたり、歌詞の意味を真剣に考えたりすることがありますが、いろは歌を聴いた時が、まさにそのような感覚です。

再来年、中斎塾フォーラム 20 周年記念式典を行う予定です。以前にもお話ししましたが、ぜひその場でいろは歌をご披露いただきたいと思います。中谷さんが歌われるいろは歌は、聴いていると自然と背筋が伸びてきます。「色は匂へど 散りぬるを」という言葉を真面目に、そして真剣に考えるきっかけを与えてくれる歌だと感じています。

それに関連し、渋澤栄一の言葉をご紹介しますと思います。西洋の音楽は、自然と背筋を伸ばして真剣に聴きたくする音楽であると述べています。

中国の周という時代には、官僚になるための大切な教養として音楽が位置付けられていました。孔子の下で論語を学び、一人前と認められる程の学問を身に付ければ、どの国でも高級官僚として迎えられたと言われています。孔子は、そうした学問を教える人物であり、その学びの場は大変重要な位置を占めていました。

渋澤栄一曰く、周の時代には、政治に関わる高級官僚、官職につく者は、必ず音楽を身に付けなければなりません。単に知識として理解するのではなく、身体に染み込むほど深く習得していなければ、国を治める資格は無いと考えられていました。その為官僚を目指す人は、音楽を自分のものにしなければならず、身に付いていない者は官職に就くことができなかったとされています。

その上で渋澤栄一は、中国周時代の音楽と西洋の音楽は合致するように感じ、西洋の音楽には背筋が自然と伸びるような、政治や学問にふさわしい要素があると感じたようです。

渋澤栄一は、中国や西洋の例を紹介した後で、日本の音楽についてはそうした点が十分に育っていないと指摘しています。日本の音楽も発達しましたが、伝統的に芸能者が扱うものとして受け継がれ、政治に関わる者が身を正し、自らを律する為に学ぶ音楽には至っていないというのです。日本の音楽にもう少し成長してほしいという思いもあり、帝国劇場をつくる運動や、鹿鳴館の建設などに取り組んだのでしょう。そのような背景を含め、渋澤栄一は音楽について語っております。

そうすると、「人にして仁ならずんば、楽をいかにせん」という言葉の意味が見えてきます。これは、高級官僚として人の道をきちんと身に付けているのであれば、音楽という学問も必ず身に付けていなければならない、ということを示しています。もし音楽を身に付けていないのであれば、人としてのあり方にも問題があるということになります。

ここで、日本の場合に思い浮かぶのが「にぎみたま（和魂）」という言葉です。ただ、にぎみたまだけでは少し分かりにくいかもしれません。「あらみたま（荒御魂）」と「にぎみたま（和魂）」という対になる言葉があり、平和の「和」の心を表すのがにぎみたまです。この魂のあり方に照らし合わせれば、人が本心から仁の心を持っていなければ、音楽も本当の意味で身に付くことはない、ということになります。

上辺だけで仁者のふりをして、実際に仁の心を持っていない人は、不仁の状態です。音楽に触れることになります。これは、仁者でもないのに仁者だと言いき張る、嘘をつく人と同じです。嘘は泥棒の始まりと言われますが、そういう方向に繋がっていきます。

自分が本当の仁者でなければ、音楽を身に付けることはできませんし、そうした人が続くようであれば、音楽という学問そのものが発達することもなく、いずれ滅びてしまうだろうということになります。この言葉には、それほど強い思いが込められているのだと感じます。

②泰伯第八【8】

子曰く、詩に興り、礼に立ち、楽に成る。

ここは博愛と捉えて良いと思います。全ての人に対する愛です。その表れ方や言葉は、人や状況により変わってきます。

例えば、仁という考えを持っていれば、親に対しては孝行という形で表れますし、主君に対しては忠という言葉になります。このように、仁はその時々との関係や場面に応じて言葉が変わるのです。

仏教でも同じような考えがあり、観音様は様々な姿に化身すると言われています。日本の仏様は八百万の神として、多くの存在に姿を変えることができます。こうした考え方からすると、仁とは、変化の元になる徳のようなものだと考えられます。心の中に徳を持っている人、という意味にもなります。

仁の心がなければ、畏敬の念、尊敬の気持ちを伴った恐れは生まれません。「何事のおわしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる」という歌のように、理由はわからなくても、自然と有難さがこみ上げてくる感情です。

伊勢神宮や出雲大社等、各地に多くの神社、仏閣があります。どこの神社でもよいですが、立ち寄ってみると、なんとなく背筋が伸びるような気がします。

私自身の体験ですが、普通の神社だと少し背筋が伸びる程度で、そこまで強く姿勢がピンと正される感じはしません。ところが、出雲大社や伊勢神宮に行くと、知らず知らずのうちに背筋が真っすぐ伸びます。境内に一步入る時、思わず敬う気持ちが湧いてきて、自然と頭が下がるのです。こうした気持ちになるのは、本当に不思議です。

このような畏敬、恐れつつも敬う心が無くなると、人間としてどうにもならない人になります。その人は滅びの道へ向かって行くでしょう。そういう意味で、この部分をしっかりと捉えることが大切だと思います。

子曰く、詩に興り、礼に立ち、楽に成る。

「詩に興り」というのは、詩に心を動かされる、感動するという意味です。詩を読んで素晴らしいと思ったり、心が揺さぶられたりする、そういう詩に出会えるとよいですね。私自身、詩を読んで心から感動した経験は一度だけです。「獄中有感」という漢詩を読んだ時でした。西郷隆盛について詳しくありませんでしたが、本当に魂が震えるような感覚があり、気づいたら涙が出ていました。

「礼に立ち」礼儀が身に付いてくると、社会で自然と相応の立場が与えられるようになります。礼儀作法をきちんと身に付けていると、それなりの役目を担う立場になるということです。

その立場には責任も伴います。例えば、幹事・代表幹事の役割は、常に周りへ気を配らなければなりません。物事がうまく回っていない時には、どこで滞っているのかを見極め、対応する必要があります。立場が上がるほど厄介事も増えますが、その分やりがいも生まれます。

つまり「礼に立つ」とは、礼をきちんと身に付けることで、自然と相応しい立場に押し出されるようになる、そう読んでいただければ良いと思います。

最近気になった話題について

ここからは素読の話題から少し離れて、雑談を致します。皆さんのご自宅の周りに、熊が出没するという方はいらっしゃいますか。いないようですね。以前お話ししましたが、赤城にある私の書斎には桃の木があり、その実を熊に食べられてしまい、木が折られたことがありました。

今回の話は自宅近くの出来事です。私は朝、自転車に乗るのですが、近くに渡良瀬川があり、よくその土手を走ります。朝7時頃いつものように走っ

ていると、河川敷に檻が置いてあるのが見えました。野生動物を餌でおびき寄せ、入ると扉が落ちて閉じ込めるタイプのものです。

その日、走りながらふと見ると、罠の中に何かが入っていました。最初は熊かと思いましたが、よく見るとイノシシでした。その後聞いた話では、そのイノシシは1時間後に駆除されたそうです。

翌日には、パトカーではないですが赤色灯をつけた車が朝から走っていました。ニュースで、熊が4頭その河川敷に出没していると報じられていました。対岸には日本赤十字病院があり、前の河川敷で母熊1頭と子熊3頭が出没しているというのです。

その為、今は自転車に乗る時熊よけスプレーを持ち歩くようになりました。こんなことになるとは思いませんでしたが、仕方ありません。最近では都会でも熊の出没があり、いつどこで遭遇するかわからない状況です。

熊と戦うのは非常に難しいです。私は赤城でも自転車に乗りますが、万が一熊に向かって来られたら、自転車を持ち上げて振り回すしかないと考えています。実際、2〜3回くらいなら持ち上げられますが、それ以上は難しいですね。まだ自転車を持ち上げて熊と対峙するくらいの体力は残っているようです。昨日テレビでも熊対策をやっていましたが、傘なども使えるそうです。

クマスプレーですが実はとても危険です。使い方を誤ると自分にかかる恐れがありますので、購入したらまず練習しましょう。

昨夜、テレビで「オソ（OSO18）」の話題が取り上げられていました。猟師の友人が北海道に住んでいて、OSO18という熊を追いかけたことがありました。OSO18は家畜の牛を襲撃し、酪農家に甚大な被害をもたらしました。その熊は、普通の獣を襲うことができない程体が弱っていました。素早い動物は捕まえられるので、罠にかかった鹿やイノシシなど、簡単に捕まえられるものを食べ、動きが遅い牛も標的となりました。そのうち人間も襲うようになり、さらに体力が衰え、最後は動けなくなったところを仕留められたとニュースになりました。

時事評論で気になった話がイーロン・マスクさんでした。実際には多くの厳しい条件が設定されているとはいえ、10年で1兆ドルをもらえる、という内容です。

現在の売上を6倍にすることなど、様々な課題を着実にクリアしていくことを初めとして、まさに綱渡りのような状況をすべてうまく乗り切り、イー

ロン・マスクさんの思い描いた通りに進んだ場合に限られます。その結果として、株主総会で承認された報酬が1兆ドル、つまり日本円で約153兆円になる、という話です。

10年という区切りの中で、会社の価値を6倍にできたのだから、自分は153兆円をもらいます、というわけです。よく言うなと思いました。この発言は、今の時代を象徴するような科白だと感じました。

恒例の質問

それでは、恒例の質問に参ります。もう今年も暮れようとしています。今年は年初に、挑戦に次ぐ挑戦の年になるでしょう、と申し上げましたが、振り返ってみると、私自身もずいぶん多くの挑戦をしてきたように思います。

何かに向かってチャレンジしなければならない、そうした年回りの話を最初に致しましたので、その点を少し頭に置きつつ、恒例の質問にお答え戴ければと思います。今年はどのような一年だったでしょうか。

○良い日が続いたなと思う方

○嘘はつかなかったし、嘘をつかれてもいないと思う方

○有難うと言ひ、有難うと言われることが多かった方

○身体の手入れをよくやっていると思う方

○自分磨きもよくやっていると思う方

○昨晚寝る時、「今日は、良い日だった。満足したな」と思って寝た方

言葉というものは力を持っています。たとえ頭の中だけで考えた一つの言葉であっても、それなりの力がありますが、頭の中で考えただけでは、それほど大きなものにはなりません。先程お話した詩のように心を打たれると、思わず立ち上がったたり、自然と声が出てきます。そして、体全体で表現したくなる、感動した時は、そういう状態になります。

ですから、良い日が続いたかどうか思い出す時に、客観的に分析する必要はありません。詩に感動する時も、これは良い詩だと感じた瞬間に心が動くのであって、1+1は2、2+2は4のように、ここは感動すべき場所だから、といった理屈に従い、後から感動しようと決めるわけではありません。

少し言い方を変えてみましょう。自分の彼女や奥さんを思い浮かべて下さい。最初でも途中で、良い人だ、素敵な人だと感じた時、それは理屈で分析した結果ではなく、瞬間的にそう感じたのではないのでしょうか。多くの場合、良い人かどうかは、直感的に伝わってくるものです。

今お話ししている事は、まさにそういうことです。一日でも、今日は本当にいい日だな、と感情が高ぶった日があれば、その感覚を思い出せば良いでしょう。それが心の中で続いていると感じられれば、それで十分です。ここでの質問についても、客観的に判断しようとせず、主観的にそう思ったら手を挙げて下さい。思わなければ、それで構いません。良い日については、そういう考え方で受け取って戴ければと思います。

身体の手入れについて、先程比田井さんが年を重ねると転んだら大変なので、夫婦で気を付けて歩いているとお話されていました。私も先日、真向法で歩き方を教わりましたが、とても分かりやすかったです。

歩く時は、まず足を前に持ち上げるための部分を鍛えることが大切で、足を持ち上げる動きを繰り返すだけで効果があります。さらに、歩く際にはつま先、特に親指でしっかり踏みしめ、爪先で蹴ると良いそうです。

その為の簡単な練習として、片足でつま先立ちをする運動があります。何かに掴まりながら行えば十分で、もう片方の足は力を抜いて構いません。少し話は逸れましたが、体の手入れは大切だというお話です。

寝る前に、今日は良かったなと思えることを一つ思い出してから横になると、自然と満足感が生まれ、良い眠りに入ることができます。以上で、恒例の質問は終わりです。

時事評論

今年の乙巳、それから来年について少しお話したいと思います。高市さんの登場で、時代が変わったと感じました。皆さんは如何でしょうか。私が特に印象に残ったのは、総理大臣が決まった瞬間、「働いて・働いて・働いて・働いて、働いて参ります」と発言したことです。数えてみると、「働いて」を5回も言っています。人の迷惑を顧みず、午前3時に出て来る。これはこれで良いのではないかと思います。というのも、人間のやる事は、見る角度によって良いとも悪いとも、捉えられるからです。

「働いて・働いて」その科白で、少しいいぞと思った事は、最近少しずつ変わってきているとはいえ、日本人の感覚として、基本的に働くことは良いことだという価値観があります。ですから、これから沢山良いことをやるぞ、と言っているように、私は受け止めました。それは良かったと思います。

実際、真夜中の3時に出てきて仕事を始めた事については、「働いて働いて」と言っていた本人もそこまで考えていなかったのではないかと思います。しかし、嫌だなと思う人たちも、出てこざるを得なくなってしまう。それについて、衆議院の予算委員会で立憲民主党が次から次へと質問していました。

その質問に対する答え方も、今までの総理大臣とは違う答え方なので、これもよろしいなと思いました。よろしいけれども、関係者は困るだろうと思います。

その一つが「台湾有事は日本有事でございます」と受け止められる科白です。実際の言い方はそこまで明快ではなく、結果としては「台湾有事の際には存立危機事態に該当します」といった表現でしたが、言っていることは大きく変わりません。

つまり、台湾を中国が武力で制圧しようとして攻めてきた場合、日本も当然それに関わることになり、日本自身も危険に晒されます。そうなれば、日本もアメリカ軍と一緒に武力を用いる可能性がある、という話になります。

これまでの総理大臣は、その点をうやむやにしてきました。麻生さんも、総理大臣を辞めてからそのたぐいの発言をしていましたし、安倍さんも同様でした。しかし、現役の総理大臣が発言するとなると、その重みは全く違います。

サナエノミクスは、赤字と黒字のバランスを取りながら、黒字を増やしていこうという考え方で、いわゆるプライマリーバランスについても、これまでの総理大臣は毎年達成しなければならないと目標を掲げていました。しかし、それは現実的ではありません。今回の総理は、すぐには出来ないのだから、何年かかけて達成すれば良い、という考え方を示しました。これは、今までの総理大臣とは答え方が全く違っていて、面白いと思いました。

国会では、自民党の議員が質問の中で、「総理は午前3時から出て大変ですね、まだ先が長いのですから、上手にサボってお休み下さい」と言っていたのが印象的でした。メディアでは「上手にサボれ」という言葉だけが一人歩きしてしまった感じもありました。

立憲民主党の議員の方がまだ穏やかでした。「お仕事が大変でしょうから、どうぞしっかり寝て下さい」と言っていたのです。「寝て下さい」と「上手にサボって下さい」このやり取りを見ていると、立憲民主党と自民党の体質の差が図らずも露呈したと思いました。

こういう型破りな人が出てくると、質問の仕方から何から、全てが変わります。その点で、非常に新鮮さを感じました。甘い柿だと思ったら実は渋かった、という感覚です。

元外務大臣の岡田さんも、そんなことを軽々しく言っているのかと、総理を^{たしな}窘めていました。与野党の質疑では、野党が総理大臣に対して批判ばかりが並び、結局すれ違ったまま終わることが多いのですが、今回は違いました。岡田さんが一段上の立場から、台湾有事や日本有事について、軽々しく発言すべきではないと、野党の質問者が総理大臣を^{たしな}窘める場面になったのです。

こんな光景を初めて見ました。面白い国になったと思います。たった一人、総理大臣が変わっただけで、与党も野党も発言の仕方が変わる。その変化が、とても興味深く感じました。

挑戦に次ぐ挑戦の年と言われる今年、高市早苗さんが登場し、サナエノミクスが一人歩きしています。今私が注目しているのは失言です。

最近「中所得者」「低所得者」という言い方をよくしますが、以前は政府が段階別に区分して政策を進めていました。私は10年ほど前から、年収200万円がボーダーラインで、200万円以下が低所得層・貧困層、そこから上が中所得者だろうと思っていました。政府も、200万円というラインをもって、この人たちは所得が少ないと明確に認めていた時期がありました。

ところが、そのボーダーライン200万円の中に、いつの間にか中所得者まで混ざってきました。今では、200万円以下は一部の中所得者と低所得者という言い方に変わり、中所得者の中には200万円以上の人もいますという表現になっています。表現が、これまでとはまるで変わったと思います。

今後出てくる可能性がある発言として、中所得者層とは年収何百万円以下を指し、低所得者とは年収何百万円以下を指すといった、線引きをめぐる発言が出てくるのではないかと考えています。貧困層という表現が消えてきている事は問題だと思っています。

例えば、介護業界について、5%以上の賃金アップをしたいと民間団体が声を上げると、政府もそれを目標にして、賃金を上げていきますとお題目のように語ります。しかし、介護の中にはいくつも段階があり、政府の重点施策の対象となっている一部の介護事業者だけが、恩恵を受けられる仕組みになっています。

仮に5つの条件があった場合、その5つ全てをクリアしたところだけが、5%賃上げの恩恵に浴します。条件を一つでも満たせない事業者は次々と対象から外れます。結果として、政府が言う5%賃上げに該当する団体はほんの僅かであり、多くの介護事業者は恩恵を受けられません。

政府の言葉を信じて、様々な老人ホームを作ってきた民間の介護事業者も、どうせあれは一部の団体だけの話で、私達には関係ないと感じているのが実情です。これは介護に限った話ではなく、他の業界や団体についても、同じことが言えると思います。政府の発表には、まやかしが多過ぎます。

これまで政府が語ってきたまやかし、いわゆる虚言をどうするのか。本人が自覚しているかどうかに関わらず、嘘をついている状態です。そうしたことが、これから次々と白日の下に晒されていくのではないかとと思っています。サナエノミクスの面白い所が出てきたな、と今考えております。

干支の話も、少ししておかなければなりません。来年は丙午（ひのえうま）にあたります。この丙午の年は、昔から出生率が下がると言われています。丙午に生まれた女性は、気性が激しく、夫を食い殺すという迷信があると言われてきました。ですから丙午生まれの女性は嫁にしてはいけない、と親が言った。そういう話です。

これは昔から伝わってきた迷信です。実際、前回の丙午の年には、出生率が約25%下がりました。その為、来年も出生率は下がるのではないか、という見方があります。迷信は迷信と分かっている、どこかで念の為という気持ちで働いてしまう。信じてはいないけれど、できればお嫁さんは丙午生まれではない方がいいといった親心が出てくるのだと思います。

そういう意味も踏まえ、来年は女性の年だと思います。丙午に生まれた女性は気が強い。もし亭主の働きが良くなければ、あなたは家に入って家事をしていて。私が稼ぐから。と言うような、気が強く、頼もしい女丈夫が生まれる年になるでしょう。巴御前のような存在かもしれません。

以前、トルコでこのような話を聞いたことがあります。トルコが経済破綻した後の話です。

そこで、以前はかなり大きな会社を経営していた社長夫妻の話を聞きました。経済破綻の影響で会社が倒産してしまい、社長はどうにもならない状態で、ほとんど寝たきりのようになってしまいました。

一方、社長の奥様は、元々上流階級出身で、とてもしとやかな方でしたが、一変しました。詳しい服装は分かりませんが、たすきがけをし、エプロンを身に付け、家政婦として働きだして今は夫を養っているようです。

今後、日本でも経済破綻や国家破産といった事態の発生が想定される為、女性が先頭に立って動く場面が、沢山出てくると思います。来年はその始まりの年になり、女性が活躍するのではないかと考えています。

女性の皆さんは、特別な事がなくても、何となく力が自然と湧いてくる年だと思って下さい。これは理屈で説明できるものではありません。丙午の余波がくるでしょう。女性は強いです。

そういう意味で、来年は楽しい年ですね。ただ、これから結婚しようとしている人は、色々考えなければならないかもしれません。最初から尻に敷かれることを想定して臨めば良いですね。

判断の三原則は、何度もお話していますので、今日は省略致します。

本日は日経新聞、朝日新聞、読売新聞を読みました。その中で、新しい流れになってきたと感じた事がいくつかありました。特に目に留まったのは、日経新聞に出ていた内容です。新しい流れが見えてきたと感じました。

まず、ユニクロが週休三日制を正式に始めた話です。週休三日制が普通になるのではないかと思いました。これまでもそうしたことを言う会社は色々出てきましたが、ユニクロが週休三日制の代表的な例になるでしょう。

それから社内食堂についてです。新たに無料の食堂を新設した会社の話です。記事には GMO グループと書いてありました。そこが無料食堂を実施しているようです。

最後は大東建託の話です。癌になった社員には、一律で 100 万円を支給するそうです。最近では癌になる方も多いので、一体幾ら用意するのだろうと思いました。今後、こうした制度を設ける会社も増えてくるでしょう。

政府も何かやらなければならない流れの中で、与野党揃ってガソリン減税に賛成しています。計算すると、27.6円程の引き下げ効果があるそうです。全員に恩恵があるのかと思いましたが、地域差が出て、地域によってはそれほど恩恵を受けられない場合もあるようです。

それでも、世の中が変わり始めていると感じましたので、次回は、来年どのような年になるかについて申し上げたいと思います。

時間が来ましたので、本日はこれで終了と致します。有難う御座居ました。